

令和7年度学校評価表

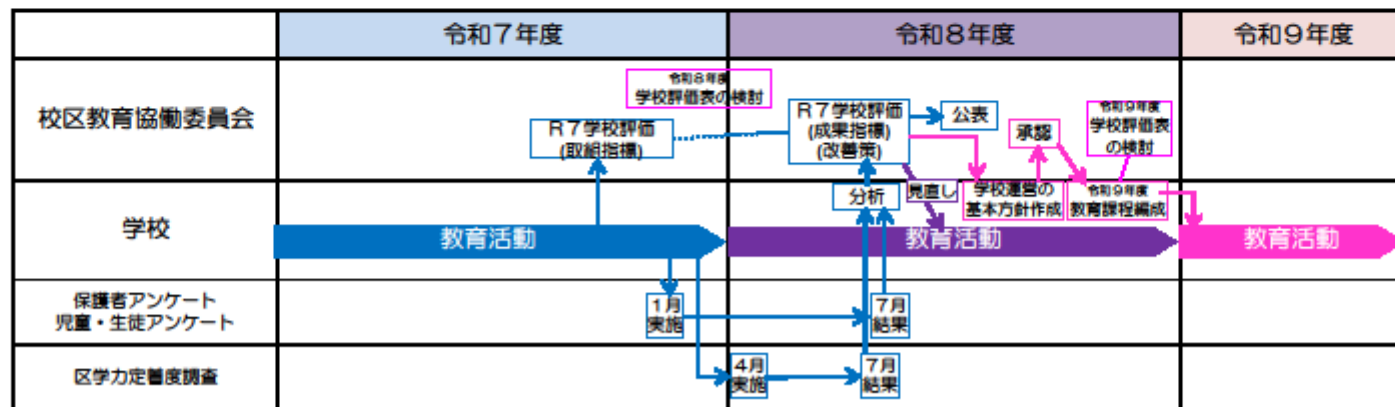
品川区立荏原第六中学校 校長 稲葉 慶太
荏原第六中学校校区教育協働委員会 委員長 小寺 康裕

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和7年度の学校評価が令和8年度および令和9年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



令和7年度 学校評価 品川区立荏原第六中学校

評価項目1 学力に関すること

重点目標		品川区学校教育要領に基づき、各教科の年間指導計画を進める。 ○ 確かな学力の育成のため、生徒に学習規律を身に付け、自学自習の態度を育てる。 ○ 対話的で深い学びの授業を実施し、幅広い知識と見方・考え方を育てる。 ○ 一人一台情報端末を利活用し、誰にとってもわかりやすい視点を展開する。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	区の学力定着度調査で、全教科においてA層B層(四分位)で6割を上回る。	区の学力定着度調査で、9年1教科で6割を上回った。その他ほとんどの教科では5割程度となった。	B	区の学力定着度調査から基礎力の定着が必要な教科を確認し、特に8年において単元毎に達成度を振り返り、未達成の場合には繰り返し学習するなど基礎力の定着を図っていく。 実施率の低い学年において、自主学習の効果を生徒に伝えていく。自主性の価値を生徒自身が認知することで、継続力を高める。
	授業の中で、見通しを持たせ、生徒の活動の場を与え、振り返りをさせる、AARを展開する。	学習プロセスAARサイクルを授業の中で実践を試みた。振り返りについて、十分に時間が確保できないこともあった。	B	
	学年の発達段階を踏まえ、自主学習を推奨し、家庭学習の習慣化を図る。	朝礼や学年だより等で自主学習を奨励し、継続する生徒も見られた。学年によって実施率に差が見られた。	B	
②	国の学習状況調査で、「話し合う活動を通じて自分の考えを深めることができた」と肯定的な意見で9割を目指す。	国の学習状況調査で「周りの人の考えを大切に、協力しながら課題解決に取り組んだ」と肯定的な意見で89%となった。	A	対話的な学習活動を取り入れる授業が増えた。単に話し合うだけでなく、学習内容を深めて行ける授業の改善を進めて行く。 生徒一人一人の意見を尊重しながら、生徒同士で合意形成できる資質・能力を高められるよう工夫をしていく。
	研修テーマ「対話的で深い学び」とした年3回の研究授業を実施、全教員の学習指導力向上を図る。	年3回の研究授業「対話的で深い学び」の中で教員の半数が実践し、全教員が協議会に参加し、意見交換を行った。	B	
	全教科で生徒の発言の場を増やし主体的な態度を育み、他者の意見を受容する協働的で深い学びとなる授業を実施する。	生徒の発言の場を積極的に設けたり、教員以外から講師を招き講話等をいただく中で、生徒の主体的な学びや多様性の涵養を育てる授業につながっている。	A	
③	区の生徒アンケートで、「授業でもっとICT機器を活用したい」と肯定的な意見で9割を目指す。	国の学習状況調査で「ICT機器の使用について」とほぼ毎日複数の授業で活用したと95%以上の意見となった。	A	ユニバーサルデザインの観点から、どの生徒にとっても理解しやすい授業内容となるように、多くの授業でICT機器の活用が進められている。その内容が継続かつ深化について今後の課題である。
	ICT機器活用を推進し、全教科の授業でUDの視点を取り入れた授業展開を図る。	全教科の授業でUDの視点を取り入れ、視覚的にも分かりやすい授業展開ができています。また、ICT活用スキルが向上している。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

令和7年度 学校評価 品川区立荏原第六中学校

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		市民科一貫プランを通して、つながる共生社会の担い手としての当事者意識をもってウェルビーイングを目指す。 ○家庭と連携し、基本的な生活習慣を身に付ける。 ○社会通念上のマナーやルールについて指導を通し、規範意識を身に付ける。 ○学校行事、生徒会など特別活動や市民科の学習から、主体的な自治活動を学ぶ。		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	区の保護者アンケートで、「基本的な生活習慣が身に付く」と肯定的な意見で9割を目指す。	区の保護者アンケートで「現在通っている学校に満足している」と肯定的な意見で91%となった。	B	教員の働き方改革の中で教員の負担を考慮しながらも、保護者会や三者面談など機会を設けることができた。 また、喫緊の課題であるSNSの利用や思春期の理解など、保護者のニーズに合わせたテーマが設定できた。
	セーフティ教室や市民科の学習を中心に、防犯以外にも基本的な生活習慣とつながるような授業を行う。	セーフティ教室ではSNSの使い方や危険性を保護者と共に学び、市民科の学習でも道徳的内容を取り入れ生活習慣の大切さを学んだ。	A	
②	区の生徒アンケートで、「自分で判断し、責任をもって行動する」と肯定的な意見で9割を目指す。	国の学習状況調査で「課題に向けて自分で考え自分から取り組んだ」と肯定的な意見で93%となった。	A	運動会や学習成果発表会、移動教室や職場体験、修学旅行など生徒の主体の運営となるよう現段階で可能な限り対応することができた。 繰り返しマナーやルールを逸脱する生徒の指導には組織的に対応してきたが、多くの時間を必要とする。家庭との協力も欠かせない。
	学校生活を通して、場に応じた行動など指導していくとともに、生徒が主体的に判断決定する場面を増やす。	行事や委員会活動など、生徒が主体的に判断する機会を意図的に増やすことができ、自ら進んで実行することができた。	A	
	市民科の授業などでマナーやルールの意味や価値を考えさせ、自ら振り返ることで規範意識を醸成する。	社会のルールやマナーから基本的な生活習慣とつながるよう市民科で学び、校外での学習や宿泊学習など実践し、振り返りの時間を設定した。	A	
③	区の生徒アンケートで、「自分の考えを伝え、友達の考えを理解し、人間関係を築く」と肯定的な意見で9割を目指す。	国の学習状況調査で「周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んだ」と肯定的な意見で89%となった。	B	学校のみならず、地域への貢献としてボランティア活動を進めている。自ら判断し行動する機会や相互理解できる機会を増やし、自己理解と他者理解に努めてきた。 ボランティア活動などに関心を持たない生徒への啓発の工夫が課題である。
	行事などの主体的に役割を担い責任をもって行動する機会を増やすことで、達成感を持つとともに自己有用感を高める。	行事や委員会活動など生徒が主体的に役割を設定し、励ましながらも責任をもって行動することで達成し、自己を褒め有用感を高められた。	A	
	伝統の地域・校内のボランティア活動を推奨し、他のために何ができるかを実践することで、他者との関係を構築する力を育成する。	地域・校内のボランティア活動を通し、自分と意見の異なる他者との相互承認を経験させ、協働して遂行する機会を意図的に設けた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

令和7年度 学校評価 品川区立荏原第六中学校

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		生涯に渡って、運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに体力の向上を図る。 ○自己の身体を正しく知り、規則正しい生活と健康の維持・増進を図る。 ○心身上、運動の大切さに気付き、自ら目標をもって体力の向上に努める。 ○スポーツを推奨し、運動の楽しさを感じることで運動の習慣化を図る。		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	国の生徒アンケートで、「学習した内容に気をつけて生活が送れている」と肯定的な意見で9割を目指す。	国の学習状況調査で「授業で学んだことを次の学習や実生活に結びつけ考えたり、生かすことができる」と肯定的な意見で81%となった。	B	保健体育や家庭科の授業以外にも、校医からの講話を行い、自分自身の健康について考える機会を設けている。ただし、生活リズムを崩している、または崩しがちな生徒の改善は時間が必要である。
	保健指導や食育の指導を通して心身の成長や健康の保持・増進に促す。	保健体育や家庭科での食育指導の他に、校医を招き歯科指導を行った。	A	
②	国の体力テストで、総合評価AB(5段階)の割合で7割を目指す。	国の体力テストで、総合評価AB(5段階)の割合で男子は43%、女子は78%となった。	B	男女の体力測定において平均に差はあったものの、個票を元に個々に現状を把握し振り返ることができた。今年度も、握力や20mシャトルランについては都の平均よりわずかに下回っていた。どちらも粘り強さに関係する項目であるところに課題が見える。無理な運動は禁物だが、レジリエンスにもつながる項目だけに別のアプローチを考えていきたい。
	体力テストで、国の平均に達していない項目(握力、持久走など)について、保健体育を通して向上を図る。	握力はほぼ横倍で国の平均とも1ポイントほど低く、持久走は20mシャトルランとし都の平均よりわずかに下回っている。	B	
	体力テストの個票から自己の能力について把握し、日常の運動について振り返らせることで、改善の意識を持たせる。	体力テスト結果の個票を生徒一人一人確認し、状況を把握することができた。授業の中で次につなげられる振り返りをさせている。	A	
③	国の生徒アンケートで、「運動やスポーツをすることが好き」と肯定的な意見で9割を目指す。	国の生徒アンケートで、「運動やスポーツをすることが好き」と肯定的な意見で9割以上となった。	A	ほとんどの生徒が「運動やスポーツをすることが好き」と答えている。これは、個々に目標を持たせ、達成度合を励まし、身体の上昇に意識を向かせる体育科教員の指導方針によるところが大きいと考える。外部講師を招聘し、多様な観点で運動を捉え、見方や考え方がしっかりと身に付いた結果となった。
	授業や部活動の中で多様なスポーツに触れることで、自己に適した運動やスポーツの存在を認識させる。	校庭が小さい中でも体育館での競技を増やしたり、多彩なスポーツに触れる機会を増やすことができた。	A	
	ブラインドサッカー体験を実施し、スポーツを通して多様性を理解し、他者を尊重するスポーツマンシップを学ぶ。	ブラインドサッカー体験、ダンス指導、空手指導など特色ある教育活動を充実させ、他者を尊重する意識の向上が図れた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

令和7年度 学校評価 品川区立荏原第六中学校

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		いじめの未然防止、早期発見、早期対応を基本として、全職員が共通理解、共通実践のもとと取り組む。 ○教職員、生徒、保護者のいじめの理解と学校の取組や協力について周知に努める。 ○いじめのない安心安全な学校風土の醸成を図るとともに、生徒のレジリエンス力を高める。 ○いじめ防止のための組織づくりと個人に任せない組織的な取り組みに努める。		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	国の生徒アンケートで、「いじめはどんな理由があってもいけない」と肯定的な意見で100%を目指す。	国の生徒アンケートで、「いじめはどんな理由があってもいけない」と肯定的な意見で100%となった。	A	粘り強く訴え続けてきたことで「いじめ」についての認識が生徒間で浸透してきたと考える。学校いじめ防止対策基本方針を見直すこともできた。保護者への周知を行うことができていたが、未だに認知に至らないケースも見られたことが課題である。
	学校生活全般で、いじめの定義を周知し、どんな理由があってもいじめは許されず、学校は認知し対応することを理解させる。	生徒には朝礼時の校長講話、保護者には4月当初保護者会にて、また地域には学校だよりやHP掲載など、学校いじめ防止対策基本方針の周知に努めることができた。	A	
②	区の生徒アンケートで、「個性を尊重し、認め合いながら関わるができる」と肯定的な意見で100%を目指す。	国の生徒アンケートで、「自分と違う意見について楽しいと思う」と肯定的な意見で81%となった。全国平均より2%高い。	B	研究授業のテーマに「対話」を置いて校内研修を実施してきたが、対話を通して理解を深められたかについては道半ばであり、授業力向上をより求めていく必要がある。また、生徒が他者を理解する価値の認知には、発達段階において多くの時間がかかることが分かった。対話を通して相手を思いやる人権感覚を養い、共生社会に向けて、多様な価値観に気付く機会を教育課程に反映していく。
	授業や行事などで対話を通して合意形成を行うなど他者理解を深め、多様な価値観を認め合うことで人権感覚を高める。	市民科などでは生徒間の対話を増やし、他者理解を深める機会を意図的に図った。一部に衝動的な行動が見られる生徒もいることから、引き続き、指導の充実を図る必要がある。	B	
	一人一台端末による調査ツールを活用し、日々の生徒の様子に目を配り、悩みのシグナルを早期に対応する体制を確保する。	一人一台端末による調査ツールを活用し、日々の生徒の相談などに時間を費やした。早期に悩みのシグナルを対応し、SCや保護者との連携を図れた。	A	
	学校いじめ防止基本方針に則り、いじめ未然防止に努め、認知時には早期には段階に応じた具体的な取り組みを実施する。	学校いじめ防止基本方針を見直し、未然防止を第一に取り組み、各月のいじめアンケートを実施、認知時において組織的な対応に努めた。	B	
③	学校いじめ対策委員会を定期的に月2回開催し、対応事案の指導方針・支援体制を話し合うなど、共通理解実践に努める。	学校いじめ対策委員会を月2回定期開催に加え、必要に応じて臨時開催も実施できた。重大事態案件においては区教委や関係諸機関との連携を速やかに行えた。	A	いじめの未然防止のため、市民科の中でいじめ予防プログラムの授業を各学年3回以上実施し、さらに道徳的授業に努めたが、生徒によって人権感覚の備わり方に個人差が見られている。当事者意識を強く持てるようないじめに関する授業への取り組み方が課題となっている。学校いじめ対策委員会では定期および臨時も含め実施し、区教委と連携を図りながら組織的な聞き取りや事実確認などができた。
	いじめ予防プログラム「トリプルチェンジ」の授業を年3回以上行う。また身近な大人が人権感覚を磨き良いモデルとなる。	いじめ予防プログラムの授業を学期毎に実施し、さらに道徳的内容の授業を市民科で実施した。生徒によって人権感覚に差が見られることから、更なる指導の充実が求められる。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 (特色ある教育活動に関すること)

重点目標		未来を創造する生徒を育てる。 ○自主・自律の精神をふまえ、豊かな心を持ち、たくましく生きる生徒を育成する ○人のために何ができるかを考え行動できる生徒を育成する。 ○家庭・地域・学校が共通理解のもと協働して生徒を育成する。		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	区の生徒アンケートで、「予定を考えながら計画的に生活することができる」と肯定的な意見で8割を目指す。	国の生徒アンケートで「平日1日平均何時間勉強しているか」で1時間以上と回答が8割を超えた。	A	全国に比べて平均勉強時間は長い方ではあるが、1日1時間以下が2割いる現状がある。勉強だけではないが、ただ何となく1日を過ごすのではなく課題を意識する習慣を身に付け、少しずつでも前進していこうとする自主性を多くの生徒に身に付けさせたい。
	学校生活を全体を通して、考え方や結果を振り返らせることでメタ認知力を高めさせ、自ら次につながる行動を求める力を養う。	学校だよりでメタ認知とは何かについて触れ、振り返りの大切さを校長講話で周知した。次への責任ある行動を励行した。	B	
②	区の生徒アンケートで、「ボランティア活動などに参加している」と肯定的な意見で5割を目指す。	区の生徒アンケートで「ボランティア活動などに参加している」と肯定的な意見で42%となった。区の平均26%より高い結果であった。	A	生徒会主体の校内ボランティアにより、ボランティア活動への関心は区内の学校より、少し高くなっている。ボランティアマインドは本校の特色ある教育活動の一つであり、継続していく。また校内に留まらず地域でのボランティア活動の参加を一層促し、共生社会への意識をさらに向上させていく。
	委員会や係活動などを積極的に担わせ、自分の行動がどう周りに影響しているかを認知できる機会を増やす。	中学生として「人のために何ができるか」を校長講話で伝え、校外外での例を出してボランティア活動を奨励した。	B	
	校内ボランティア活動「ハートウォーミング」の活動を生徒会中心に活性化させ、自らが良い学校を作っている意識を醸成させる。	校内ボランティア活動「ハートウォーミング」を生徒会が中心となって運営し、校内の花壇の整備など生徒自ら努めることができた。	A	
③	区の保護者アンケートで、「学校は地域と連携している」と肯定的な意見で9割を目指す。	区の保護者アンケートで「市民科は、良い学習だと思う」と肯定的な意見で95%となった。	B	品川区の特色ある教育活動の市民科の一層の理解を図るため、公開授業に参加しやすい工夫（行事の見直し）が図れたことは一つの成果と考える。また、地域による温かい協力により、地域と生徒が協働して活動ができる機会を持てるなど地域連携が図れた。一過性のものとせず、継続していきたい。
	行事の他に、土曜日の学校公開を年4回、市民科授業地区公開講座など、生徒のようすを公開し、教育活動を啓蒙していく。	運動会や学習成果発表会には9割近くの保護者が参観し、学校公開では特に7学年で6割の保護者が参観した。市民科授業地区公開講座後に保護者会を実施するなど工夫を行った。	A	
	地域の外部人材を可能な限り活用する。また地域と学校が協働できる活動を模索していく。	働いている人の話を聞く授業寺子屋や茶道体験など地域の教育力を活用することができた。地域運動会など学校と協働する場が提供できた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成